

# 日蓮聖人教学における仏法の弘通（三）

——四依の菩薩を中心として——

庵 谷 行 亨

## 一 はじめに

本稿は、能弘の師である「四依の菩薩」を中心として「日蓮聖人教学における仏法の弘通」について考察するものである。全体を三回に分けており、第一回は「日蓮聖人教学における仏法の弘通（一）」（『日蓮学』第四号）として、主に「五義の概要」「四依の菩薩」について述べた。

続いて第二回は「日蓮聖人教学における仏法の弘通（二）」（『身延山大学仏教学部紀要』第二十一号）として、付法蔵と付嘱を視点として「仏法とその弘通者」、付嘱についての「天台大師の解釈」について検討した。

さらにここでは「日蓮聖人教学における仏法の弘通（三）」として、「日蓮聖人教学における仏法弘通の次第」について考察したい。

## 二 日蓮聖人教学における仏法弘通の次第

日蓮聖人は末法正時（末法こそが釈尊の教えによつて救われるべき時）の視点から法華経を受け止め、天台大師・妙楽大師等の法華経解釈をとおして本化の教学を樹立していかれた。仏の教法は弘まるべき時と弘めるべき師があつて、教えとしての意義を成就する。そのような仏法弘通の次第は釈尊の未來記として仏法の歴史に必然付けられている。ここでは日蓮聖人遺文をとおして、法と時と師を視点とした仏法弘通の次第について検討していきたい。

文永九年（一二七二）に系年される『下方他方旧住菩薩事』には次のように述べられている。

龍樹・天親・南岳・天台・伝教等不<sub>レ</sub>弘<sub>三</sub>通本門<sub>一</sub>事。

一不<sub>三</sub>付嘱<sub>二</sub>故<sub>二</sub>時不<sub>レ</sub>来<sub>二</sub>故<sub>三</sub>迹化他方故四機未<sub>レ</sub>堪<sub>二</sub>故。龍樹談<sub>二</sub>宣迹門意<sub>二</sub>天親約<sub>レ</sub>文釈<sub>レ</sub>之<sub>二</sub>不<sub>レ</sub>明<sub>二</sub>化道始終<sub>一</sub>。天台大師弘<sub>三</sub>通本迹始終<sub>一</sub>。但本門三学未<sub>三</sub>分明<sub>二</sub>歟。<sup>1)</sup>

龍樹・天親・南岳・天台・伝教等が本門の教えを弘通しなかつた理由について、「不付嘱」「時期不来」「迹化他方」「機未堪」を挙げ、龍樹は「迹門談宣」、天親は「不明化道始終」、天台大師は「弘通本迹始終」であり、「本門三学未分明」とされている。

『開目抄』には次のように述べられている。

一念三千の法門は但法華経の本門寿量品の文の底にしづめたり。龍樹天親知て、しかもいまだひろいいたさず。但我が天台智者のみこれをいだけり。<sup>2)</sup>

一念三千の法門は「本門寿量品の文の底にしづめ」られていて、龍樹・天親は知りながら表には示さず、天台智者

のみが「これをいだ」いたとされている。龍樹・天親は内鑑冷然、天台大師は迹面本裏の意である。

『観心本尊抄』には次のように述べられている。

①夫一念三千法門一代權実削<sub>レ</sub>名目<sub>二</sub>四依諸論師不<sub>レ</sub>載<sub>レ</sub>其義<sub>一</sub>。漢土日域人師不<sub>レ</sub>用<sub>レ</sub>之<sub>三</sub>。

②諸論師事天台大師云天親龍樹内鑑冷然。外適<sub>二</sub>時宜<sub>一</sub>各權所<sub>レ</sub>扱。而人師偏解學者苟執遂興<sub>二</sub>矢石<sub>一</sub>各保<sub>二</sub>一辺<sub>一</sub>大乖<sub>二</sub>聖道<sub>一</sub>也等云云。章安大師云天竺<sub>二</sub>天論尚非<sub>レ</sub>其類<sub>一</sub>。真且人師何<sub>レ</sub>勞及<sub>レ</sub>語。此非<sub>二</sub>誇耀<sub>一</sub>法相然耳等云云。天親龍樹馬鳴堅慧等内鑑冷然。雖<sub>レ</sub>然時未<sub>レ</sub>至故不<sub>レ</sub>宣<sub>レ</sub>之歟。於<sub>二</sub>人師<sub>一</sub>者天台已前或含<sub>レ</sub>珠或一向不<sub>レ</sub>知<sub>レ</sub>之。已後人師或初破<sub>レ</sub>之後有<sub>二</sub>帰伏人<sub>一</sub>或一向不<sub>レ</sub>用者有<sub>レ</sub>之<sub>四</sub>。

③問曰龍樹天親等如何。答曰此等聖人知而不<sub>レ</sub>言<sub>レ</sub>之仁也。或迹門一分宣<sub>レ</sub>之不<sub>レ</sub>云<sub>三</sub>本門与<sub>二</sub>観心<sub>一</sub>。或有<sub>レ</sub>機無<sub>レ</sub>時歟。或機時共無<sub>レ</sub>之歟。天台伝教已後知<sub>レ</sub>之者多々也。用<sub>二</sub>聖智<sub>一</sub>故也。所謂<sub>二</sub>三論嘉祥・南三北七百人・華嚴宗法蔵・清凉等・法相宗玄奘三蔵慈恩大師等・真言宗善無畏三蔵金剛智三蔵不空三蔵等・律宗道宣等初存<sub>二</sub>反逆<sub>一</sub>後一向帰伏也<sub>五</sub>。

④問正像二千余年之間四依菩薩並人師等建立<sub>二</sub>余仏小乘・權大乘・爾前迹門積尊等寺塔<sub>一</sub>本門寿量品本尊並四大菩薩三國王臣俱未<sub>レ</sub>崇<sub>レ</sub>重之<sub>二</sub>由申<sub>レ</sub>之<sub>一</sub>。此事粗雖<sub>レ</sub>聞<sub>レ</sub>之前代未聞故驚<sub>二</sub>動耳目<sub>一</sub>迷<sub>二</sub>惑心意<sub>一</sub>。

⑤問曰此経文遣使還告如何。答云四依也。四依有<sub>二</sub>四類<sub>一</sub>。小乘四依多分正法前五百年出現。大乘四依多分正法後五百年出現。三迹門四依多分像法一千年・少分末法初也。四本門四依地涌千界末法始必可<sub>二</sub>出現<sub>一</sub>。今遣使還告地涌也。是好良藥寿量品肝要名体宗用教南無妙法蓮華經是也。此良藥仏猶不<sub>レ</sub>授<sub>二</sub>与迹化<sub>一</sub>。何況他方乎<sub>六</sub>。

⑥法師品云況滅度後。寿量品云今留在<sub>レ</sub>此。分別功德品云惡世末法時。藥王品云後五百歲於閻浮提広宣流布。涅槃経

云譬如<sub>レ</sub>七子。父母非<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>平等。然於<sub>レ</sub>病者。心則偏重等云云。以<sub>レ</sub>已前明鏡推<sub>レ</sub>知仏意。仏出世非<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>靈山八年諸人。為<sub>レ</sub>正像末人<sub>一</sub>也。又非<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>正像二千年人<sub>一</sub>。末法始<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>如<sub>レ</sub>予者<sub>一</sub>也。云然於病者。指<sub>レ</sub>滅後法華經誹謗者也。今留在此者。指<sub>レ</sub>於此好色香味而謂不美者也。地涌千界不<sub>レ</sub>出<sub>レ</sub>正像者。正法一千年之間。小乘權大乘也。機時共無<sub>レ</sub>之。四依大士以<sub>レ</sub>小權<sub>一</sub>為<sub>レ</sub>縁在世下種令<sub>レ</sub>脱<sub>レ</sub>之。多<sub>レ</sub>謗可<sub>レ</sub>破熟益。故不<sub>レ</sub>説<sub>レ</sub>之。例如<sub>レ</sub>在世前四味機根<sub>一</sub>也。像法中末觀音藥王示<sub>レ</sub>現南岳天台等<sub>一</sub>出現以<sub>レ</sub>迹門<sub>一</sub>為<sub>レ</sub>面以<sub>レ</sub>本門<sub>一</sub>為<sub>レ</sub>裏。百界千如一念三千<sub>一</sub>其義。但論理具<sub>レ</sub>事行南無妙法蓮華經<sub>一</sub>五字並本門本尊末<sub>一</sub>広行<sub>レ</sub>之。所詮有<sub>レ</sub>円機無<sub>レ</sub>円時<sub>一</sub>故也。今末法初以<sub>レ</sub>小打<sub>レ</sub>大以<sub>レ</sub>權破<sub>レ</sub>實東西共失<sub>レ</sub>之天地顛倒。迹化四依隱不<sub>レ</sub>現前<sub>一</sub>。諸天弃<sub>レ</sub>其國不<sub>レ</sub>守<sub>レ</sub>護<sub>レ</sub>之。此時地涌菩薩始出<sub>レ</sub>現世<sub>一</sub>。但以<sub>レ</sub>妙法蓮華經<sub>一</sub>五字令<sub>レ</sub>服<sub>レ</sub>幼稚。因謗隨惡必因得益是也。我弟子惟<sub>レ</sub>之。地涌千界教主積尊初發心弟子也。寂滅道場不<sub>レ</sub>來<sub>レ</sub>双林最後不<sub>レ</sub>訪不<sub>レ</sub>孝失<sub>レ</sub>之。迹門十四品不<sub>レ</sub>來<sub>一</sub>。本門六品立<sub>レ</sub>座但八品之間來還。如<sub>レ</sub>是高貴大菩薩約<sub>レ</sub>足三仏<sub>一</sub>受<sub>レ</sub>持<sub>レ</sub>之。末法初可<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>出歟。當<sub>レ</sub>知此四菩薩現<sub>レ</sub>折伏<sub>一</sub>時成<sub>レ</sub>賢王<sub>一</sub>誠<sub>レ</sub>責愚王<sub>一</sub>行<sub>レ</sub>撰受<sub>レ</sub>時成<sub>レ</sub>僧弘<sub>一</sub>持<sub>レ</sub>正法<sub>一</sub>。

⑦問曰。仏記文云何。答曰。後五百歲於<sub>レ</sub>閻浮提<sub>一</sub>広宣流布。天台大師記云。後五百歲遠沾<sub>レ</sub>妙道<sub>一</sub>。妙樂記云。末法之初冥利不<sub>レ</sub>無。伝教大師云。正像稍過已。末法太有<sub>レ</sub>近等云云。末法太有<sub>レ</sub>近。我時非<sub>レ</sub>正時<sub>一</sub>云意也。伝教大師日本記云。末法始<sub>一</sub>云語。代像終末初。尋<sub>レ</sub>地唐東羯西。原<sub>レ</sub>人則五濁之生鬪諍之時。經云猶多怨嫉況滅度後。此言良有<sub>レ</sub>以也。此積鬪諍之時云云。今指<sub>レ</sub>自界叛逆<sub>一</sub>。西海侵逼<sub>一</sub>二難<sub>一</sub>也。此時地涌千界出現。本門積尊為<sub>レ</sub>脇士<sub>一</sub>。閻浮提第一本尊可<sub>レ</sub>立<sub>レ</sub>此國。月支震旦未<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>此本尊<sub>一</sub>。日本國上宮建<sub>レ</sub>立<sub>レ</sub>四天王寺<sub>一</sub>。未<sub>レ</sub>來<sub>レ</sub>時。以<sub>レ</sub>阿弥陀他方<sub>一</sub>為<sub>レ</sub>本尊。聖武天王建<sub>レ</sub>立<sub>レ</sub>東大寺。華嚴經教主也。未<sub>レ</sub>顯<sub>レ</sub>法華經實義<sub>一</sub>。伝教大師粗顯<sub>レ</sub>示<sub>レ</sub>法華經實義<sub>一</sub>。雖然時未<sub>レ</sub>來<sub>レ</sub>之故。建<sub>レ</sub>立<sub>レ</sub>東方鵝王<sub>一</sub>不<sub>レ</sub>顯<sub>レ</sub>本門四菩薩<sub>一</sub>。所詮為<sub>レ</sub>地涌千界<sub>一</sub>讓<sub>レ</sub>與<sub>レ</sub>此<sub>一</sub>故也。此菩薩蒙<sub>レ</sub>仏勅<sub>一</sub>近在<sub>レ</sub>大地下<sub>一</sub>。正像未<sub>レ</sub>出現<sub>一</sub>。末法又不<sub>レ</sub>

出来<sup>二</sup>大妄語<sup>一</sup>大士也。三仏未来記亦同<sup>二</sup>泡沫<sup>一</sup>。(略)天晴地明。識<sup>二</sup>法華<sup>一</sup>者可得<sup>二</sup>世法<sup>一</sup>歟。不<sup>レ</sup>識<sup>二</sup>一念三千<sup>一</sup>者仏起<sup>二</sup>大慈悲<sup>一</sup>。五字内裏<sup>二</sup>此珠<sup>一</sup>。令<sup>レ</sup>懸<sup>二</sup>末代幼稚<sup>一</sup>類<sup>③</sup>。

①は第十七番問答の問いの文で、答者の一念三千・十界互具の主張に対し、問者が疑難を示したものである。一念三千・十界互具は四依の諸論師や漢土日域の人師も説いていないとの批判である。

②は第十七番問答の答えの文で、①の疑難に答えたものである。天台大師の『摩訶止観』を引用して天親・龍樹等は内鑑冷然であるとし、時が「未至」のゆえに「不宣」とされている。さらに、天台以前は「含珠」か「不知」、天台以後は「初破後伏」と「一向不用」の者がいるとされている。

③は第十九番問答である。龍樹・天親は「知而不言之仁」あるいは「迹門一分」を宣べ「本門与観心」を言わずとし、その理由を機時に求めている。さらに②に関連して天台・伝教已後の諸師の帰伏について明かされている。諸師の帰伏については『開目抄』<sup>⑩</sup>、『曾谷入道殿許御書』<sup>⑪</sup>、『撰時抄』<sup>⑫</sup>などにも詳細に論じられている。

④は第二十一番問答の問文である。正像二千余年の間は四依菩薩並びに人師等が余仏小乗・権大乘・爾前迹門の釈尊等の寺塔を建立したが本門寿量品の本尊並びに四大菩薩を三国の王臣が崇重していないことへの疑難である。正像二千余年は小乗・権大乘・爾前迹門の釈尊等の寺塔建立、末法今時は本門寿量品の本尊並びに四大菩薩が崇重されるべき時であることを示している。

⑤は第二十四番問答である。法華経寿量品の「遣使還告」は何かとの質問に答えて、四依について説明し、小乗の四依は多分は正法時の前の五百年に出現、大乘の四依は多分は正法時の後の五百年に出現、迹門の四依は多分は像法時一千年、少分は末法時の初に出現、本門の四依は地涌千界であり、末法時の初めに必ず出現するのであり、寿量品

所説の「遣使還告」は地涌菩薩である、とされている。すなわち、日蓮聖人は、末法時の四依は遣使還告の人たる本化地涌菩薩であり、その本門四依地涌菩薩が弘通する法は「是好良薬」たる「寿命品肝要名体宗用教南無妙法蓮華経」であるとされている。

⑥は第二十九番問答の答文である。法師品・寿命品・分別功德品・薬王品・涅槃経の経文を挙げて、滅後末法の悪世こそ、父母が病子に偏重の慈愛を寄せるがごとく、釈尊の慈悲の良薬によって救われるべき時であることを論証されている。時は末法の初め(天地顛倒)、機は法華経誹謗者(幼稚。顛倒の凡夫)、教は好色香味の良薬(妙法蓮華経の五字)、能弘の師は教主釈尊の初発心の弟子である地涌菩薩(高貴の大菩薩)である。像法中末における南岳・天台等の「迹面本裏の理具論」に対し、末法今時は本化地涌菩薩によって「事行の南無妙法蓮華経五字並びに本門本尊」が広く行ぜらるべき時であることの必然性を確信をもって表明されている。

⑦は第三十番問答である。第二十九番問答の「末法今時における本化地涌菩薩の出現および本門題目の流布と本門本尊の建立」についての確信の文を受けて、問者が「仏の記文は如何」とその証文を糺したものである。答文は薬王品『法華文句』『守護国界章』『法華秀句』法師品を挙げて論証し、歴史上いまだかつてない四菩薩を脇士とした本門の本尊(一閻浮提第一の本尊)が建立されるとして、その任を担う地涌菩薩の末法出現は必然的であるとされている。『富木殿御返事』には次のように述べられている。

設日蓮死生雖<sub>レ</sub>為<sub>二</sub>不定<sub>一</sub>妙法蓮華経五字流布無<sub>レ</sub>疑者歟。伝教大師御本意円宗為<sub>レ</sub>弘<sub>二</sub>日本<sub>一</sub>。但定慧存生弘<sub>レ</sub>之円戒死後蹟<sub>レ</sub>之。為<sub>二</sub>事相<sub>一</sub>故一重大難有<sub>レ</sub>之歟。仏滅後二千二百二十余年、于<sub>レ</sub>今寿命品仏与<sub>二</sub>肝要五字<sub>一</sub>不<sub>レ</sub>流布<sub>一</sub>。当時論<sub>二</sub>果報<sub>一</sub>者恐者超<sub>二</sub>伝教・天台<sub>一</sub>勝<sub>二</sub>龍樹・天親<sub>一</sub>歟。無<sub>二</sub>文理<sub>一</sub>者大慢豈過<sub>レ</sub>之哉。<sup>13)</sup>

日蓮の死生は不定でも「妙法蓮華經の五字」の流布は疑いないとの確信を述べ、伝教大師は日本に円宗を弘めて定慧を明らかにし円戒を死後に顕したことを指摘し、仏滅後二千二百二十余年（末法の初め）に寿命品の仏（本門の本尊）と肝要の五字（本門の題目）はいまだ流布していないが、自身の果報（功德）を思えば伝教・天台に超え龍樹・天親にも勝るとされている。

『波木井三郎殿御返事』には次のように述べられている。

如来滅後四依大士出三世正像弘通此經之時猶多留難。（略）正法一千年龍樹天親等為弘御使弘法。雖然但弘通小權二教実大乘未弘通之。入像法五百年天台大師出現漢土破失南北邪義立正正義。所謂教門五時觀門一念三千是也。挙国号小釈迦。雖然於円定円慧者弘宣之円戒未弘之。仏滅後入一千八百年日本伝教大師出現世自欽明已來二百余年之間六宗邪義破失之。其上天台未弘円頓戒弘宣之。所謂叡山円頓大戒是也。但仏滅後二千余年三朝之間数万寺々有之。雖然本門教主寺塔地涌千界菩薩別所授与妙法蓮華經五字未弘通之。有經文無国土。時機未至故歟。

仏滅後正像時における四依の大士の弘通が留難多きことを挙げ、正法時に龍樹・天親が小権二教を弘通し、像法五百年に天台大師が教門の五時と觀門の一念三千を明かして円定円慧を弘宣し、仏滅後一千八百年に伝教大師が円頓戒を弘宣したが、「本門の教主の寺塔」と「地涌千界菩薩に別して授与された妙法蓮華經の五字」はいまだ弘通されていないとし、未弘の理由は時機が至らないゆえかとされている。

『小乘大乘分別鈔』には次のように述べられている。

二乗作仏・久遠実成は法華經の肝用にして諸經に対すれば奇たりと云へども、法華經の中にてはいまだ奇妙なら

ず。一念三千と申す法門こそ、奇が中の奇、妙が中の妙にて、華嚴・大日経等に分絶たるのみならず、八宗の祖師の中にも真言等の七宗の人師名をだにもしらず、天竺の大論師龍樹菩薩・天親菩薩は内には珠を含、外にはかきあらわし給ざりし法門なり。<sup>15)</sup>

一念三千法門の重要性を指摘し、龍樹菩薩・天親菩薩は内には知りながら外には示さなかつたとされている。『開目抄』における「龍樹天親知て、しかもいまだひろいださず」と類似の表現である。

『法華行者値難事』には次のように述べられている。

① 夫在世与<sub>レ</sub>滅後正像二千年之間法華経行者唯有<sub>三</sub>三人<sub>一</sub>。所謂仏与<sub>三</sub>天台伝教<sub>二</sub>也。(略) 龍樹・天親等論師内鑑外不<sub>レ</sub>發論師也。如<sub>レ</sub>経宣伝正法四依不<sub>レ</sub>如<sub>三</sub>天台伝教<sub>一</sub>。<sup>16)</sup>

② 龍樹・天親共千部論師也。但申<sub>三</sub>權大乘<sub>二</sub>法華経存<sub>レ</sub>心不<sub>レ</sub>吐<sub>レ</sub>口此有<sub>三</sub>口伝<sub>一</sub>。天台・伝教宣<sub>レ</sub>之本門本尊与<sub>三</sub>四菩薩戒壇南無妙法蓮華経<sub>二</sub>五字<sub>一</sub>殘<sub>レ</sub>之。所詮一仏不<sub>三</sub>授与<sub>二</sub>故<sub>一</sub>二時機未熟故也。今既時来。四菩薩出現歟。日蓮此事先知<sub>レ</sub>之。<sup>17)</sup>

①は在世と滅後正像二千年の間には法華経の行者は仏と天台・伝教の三人のみであるとし、龍樹・天親等の論師は内鑑冷然であり、正法の四依も天台・伝教には及ばないとされている。

②は追申文である。龍樹・天親は千部の論師であるが、權大乘を説き、法華経は心には知りながら口には述べず、天台・伝教はこれを宣べたが「本門の本尊と四菩薩と戒壇と南無妙法蓮華経の五字」は弘めなかつたとして、その理由を「不授与」「時機未熟」のゆえとされている。

『法華取要抄』には次のように述べられている。



問云如来滅後二千年龍樹・天親・天台・伝教所殘秘法何物乎。答曰本門本尊与戒壇与題目五字也。問曰正像等何不弘通乎。答曰正像弘通之小乘・權大乘・迹門法門一時可滅尽也。問曰滅尽佛法之法何弘通之乎。答曰於末法者大・小・權・実・顯・密共有教無得道。一閻浮提皆為謗法了。為逆縁但限妙法蓮華經五字耳。例如不輕品。我門弟順縁日本国逆縁也。疑云何捨略取要乎。答曰玄奘三藏捨略好。四十卷大品經成二百卷。羅什三藏捨略好。千卷大論成三百卷。日蓮捨略好。肝要。所謂上行菩薩所伝妙法蓮華經五字也。(略) 仏既入宝塔二仏並座分身來集召出地涌取肝要当末代授与五字当世不可有異義。<sup>(18)</sup>

仏滅後二千年の間に龍樹・天親・天台・伝教が弘め残した「秘法」は何かとの問いに対して、「本門の本尊と戒壇と題目の五字」であると答える。さらに正像等にどうして弘通しなかつたのかと問いを重ね、正像時に弘通すると小乘・權大乘・迹門の教えが一時に滅尽すると答える。仏法を滅尽せしめる法をなぜ弘通するのかとの問いを起し、末法時には大・小・權・実・顯・密などの教はあるが得道することがなく、皆謗法の者となつてゐることから不輕品のごとく逆縁には「妙法蓮華經の五字」でなければならぬと答える。さらにどうして略を捨て要を取るのかとの問いに対して、法華經虚空會で二仏が並坐して地涌菩薩に授与した教法が「肝要の法」であり、それはすなわち「上行菩薩所伝の妙法蓮華經の五字」であるとす。

末法時は謗法者充滿の時代であるために、逆縁教化の要法である「妙法蓮華經の五字」でなければならぬのである。「妙法蓮華經の五字」は上行菩薩所伝の末代の良薬である。

『新尼御前御返事』には次のように述べられている。

日蓮聖人教学における仏法の弘通 (三) (庵谷行亭)

我五百塵点劫より大地の底にかくしをきたる真の弟子あり。此にゆづるべしとて、上行菩薩等を涌出品に召出させ給て、法華經の本門の肝心たる妙法蓮華經の五字をゆづらせ給て、(略) 日蓮上行菩薩にはあらねども、ほほ兼てこれをしれるは、彼の菩薩の御計かと存て、此二十余年が間此を申。<sup>19)</sup>

釈尊は「真の弟子」(久遠の弟子)である上行菩薩等を涌出品に召出して「法華經の本門の肝心である妙法蓮華經の五字」を譲与されたとある。『法華取要抄』の「上行菩薩所伝の妙法蓮華經の五字」と類似した表現である。「日蓮上行菩薩にはあらねども」と記されているのは、上行菩薩を意識した謙讓である。

『曾谷人道殿許御書』には次のように述べられている。

①夫以療<sub>レ</sub>治重病<sub>レ</sub>構<sub>レ</sub>索良藥<sub>レ</sub>救<sub>レ</sub>助逆謗<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>如<sub>レ</sub>要法<sub>レ</sub>。所謂論<sub>レ</sub>時正像末。論<sub>レ</sub>教小大・偏円・權実・顕密。論<sub>レ</sub>国中<sub>レ</sub>辺<sub>レ</sub>両国。論<sub>レ</sub>機已逆与<sub>レ</sub>未逆<sub>レ</sub>已謗与<sub>レ</sub>未謗<sub>レ</sub>。論<sub>レ</sub>師凡師与<sub>レ</sub>聖師<sub>レ</sub>二乘与<sub>レ</sub>菩薩<sub>レ</sub>他方与<sub>レ</sub>此土<sub>レ</sub>迹化与<sub>レ</sub>本化<sub>レ</sub>。故四依菩薩等出<sub>レ</sub>現於滅後<sub>レ</sub>仏随<sub>レ</sub>於付属<sub>レ</sub>妄不<sub>レ</sub>演<sub>レ</sub>説於經法<sub>レ</sub>。<sup>20)</sup>

②今既入<sub>レ</sub>末法<sub>レ</sub>在世結縁者漸々衰微權実<sub>レ</sub>二機皆悉尽。彼不<sub>レ</sub>輕菩薩出<sub>レ</sub>現於末世<sub>レ</sub>令<sub>レ</sub>擊<sub>レ</sub>毒鼓<sub>レ</sub>之時也。而今時学者迷<sub>レ</sub>惑於時機<sub>レ</sub>或弘<sub>レ</sub>通於小乘<sub>レ</sub>或授<sub>レ</sub>与<sub>レ</sub>權大乘<sub>レ</sub>或演<sub>レ</sub>説於一乘<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>題目之五字<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>三下種<sub>レ</sub>之由来不<sub>レ</sub>知歟。<sup>21)</sup>

③仏滅後有三時<sub>レ</sub>。所謂正法一千年前五百年迦葉・阿難・商那和修・末田地・脇比丘等一向以<sub>レ</sub>小乘之藥<sub>レ</sub>对<sub>レ</sub>治衆生輕病<sub>レ</sub>。(略) 後五百年馬鳴菩薩・龍樹菩薩・提婆菩薩・無著菩薩・天親菩薩等諸大論師初諸小聖所弘小乘經通<sub>レ</sub>達之後一々破<sub>レ</sub>失彼義<sub>レ</sub>了弘<sub>レ</sub>通諸大乘經<sub>レ</sub>。是又以<sub>レ</sub>中藥<sub>レ</sub>衆生对<sub>レ</sub>治於中病<sub>レ</sub>。(略) 問曰迦葉・阿難等諸小聖何不<sub>レ</sub>弘<sub>レ</sub>大乘經<sub>レ</sub>。答曰一自身不<sub>レ</sub>堪故。二無<sub>レ</sub>所被機<sub>レ</sub>故。三從<sub>レ</sub>仏不<sub>レ</sub>讓与<sub>レ</sub>故。四時不<sub>レ</sub>來故。問曰龍樹・天親等何不<sub>レ</sub>弘<sub>レ</sub>大乘經<sub>レ</sub>。答曰有<sub>レ</sub>四義<sub>レ</sub>。如<sub>レ</sub>先。<sup>22)</sup>

④爾時大覺世尊演說壽量品然後示現於十神力付屬於四大菩薩。其所屬之法何物乎。法華經之中捨廣取略捨略取要。所謂妙法蓮華經之五字名体宗用教五重玄也。(略)但持此一大秘法隱居於本処之後仏滅後於正像二千年之間未一度出現。所詮仏專限末世之時付屬於此等大士故也。(略)地涌千界大菩薩一住於娑婆世界一多塵劫。二隨於釈尊自久遠已來初發心弟子。三娑婆世界衆生最初下種菩薩也。如是等宿縁之方便超過於諸大菩薩。<sup>(23)</sup>

⑤慧日大聖尊以仏眼兼鑑之。故捨棄於諸大聖召出此四聖伝於要法也。定於末法之弘通也。(略)然則迦葉・阿難等一向弘通於小乘經不申於大乘經。龍樹・無著等申於權大乘經不弘通一乘經。設申之纔以指示之或迹門之一分宣之全不談化道始終。南岳・天台等觀音・藥王等為化身小大・權實・迹本二門化道始終・師弟遠近等悉宣之其上立已今當之三説判一代超過之由勝於天竺諸論過於真丹衆釈。(略)伝教大師仏滅後相當一千八百年像法之末生於日本国小乘・大乘・一乘諸戒一々分別之梵網・瓔珞以別受戒破失小乘二百五十戒又法華普賢以円頓大王之戒諸大乘經責下臣民之戒。此之大戒除於靈山八年一闍浮提之内所未有大戒場建立於叡山。(略)此外漢土三論宗之吉藏大師並一百人法相宗之慈恩大師華嚴宗法藏・澄觀真言宗善無畏・金剛智・不空・惠果日本弘法・慈覺等三藏諸師非四依大士暗師也愚人也。<sup>(24)</sup>

⑥迦葉・阿難等龍樹・天親等天台・伝教等諸大聖人知而所未弘宣肝要秘法法華經文赫々。論釈等不載明々。<sup>(25)</sup>

⑦予倩案事之情大師於藥王菩薩侍於靈山会上仏上行菩薩出現之時兼記之故粗喩之歟。而予非地涌一分兼知此事。故前立地涌之大士粗示五字。<sup>(26)</sup>

①は重病者を療治するには良薬を構索し逆誘者を救助するには要法が必要であるとして、末法悪世の逆誘者(重病

者)を救済するには要法(良薬)でなければならぬとする。続いて時・教・国・機・師の五義の視点からそれぞれに分別があることを述べ、仏滅後における四依の菩薩の弘法上の留意点を挙げられている。四依は、五義の中では師に関わる事項であるが、五義のそれぞれは密接に関連し合っている。

②は末法に入ると在世の結縁者がしだいに衰微し権実の二機が皆悉く尽きるために、逆謗者に対して毒鼓をもって下種しなければならぬとし、今時の学者は時機に迷い小乗・権大乘・一乗を説いて、「題目の五字」で下種することを知らないとする。末法悪世の逆謗者には「題目の五字」の毒鼓下種であるとの教示である。

なお、「在世結縁者漸々衰微権実二機皆悉尽」とは「末法は仏種なき機」ではなく、「末法は法華經の信を具足しない機が充滿している」の意味である。法華經の化益は久遠の父子結縁であることから、一切衆生は時空を超えて普遍的に仏種を具有している。法華經の信からの退転・亡失(忘失)・經歷や謗法が「法華經の信を具足しない機」であり、それを「皆悉尽」と表現されているのである。題目による逆縁下種は本質的には「法華經の信の蘇生」である。<sup>27)</sup>

③は仏滅後に三時ありとし、正法一千年の前五百年は迦葉・阿難・商那和修・末田地・脇比丘等がもつぱら小乗の葉で衆生の輕病を対治し、後五百年は馬鳴菩薩・龍樹菩薩・提婆菩薩・無著菩薩・天親菩薩等の諸大論師が諸大乘經の中葉で衆生の中病を対治することを示す。さらに迦葉・阿難等の諸小聖はどうして大乘經を弘めなかったのかとの問いを設け、「不堪」「無所被機」「不讓与」「時不來」の理由を挙げ、重ねての龍樹・天親はなぜ一乘經を弘めなかったのかとの問いにも理由は同じであると答えている。

④は、寿命品の後に説かれた神力品において、四大菩薩に要法の「妙法蓮華經の五字名体宗用教の五重玄」が付囑されたとし、この菩薩が「一大秘法」を奉持して本処に隱居し、正像二千年の間に一度も出現しなかったのは、もつ

ばら末法の世に出現するために仏から付嘱を受けたからであるとし、地涌菩薩は娑婆世界に久住し、釈尊の久遠来の初発心の弟子で、娑婆世界の衆生の中で最初に下種された菩薩であつて、他の諸大菩薩よりも宿縁がはるかに超過している、とされている。

「妙法蓮華經之五字名体宗用教五重玄也」は『観心本尊抄』⑤の「是好良薬寿命品肝要名体宗用教南無妙法蓮華經是也」と類似した表現である。五重玄義は天台大師が『法華玄義』に説いた法華經の奥義である。天台大師は『法華文句』において神力品の四句要法を、「如来一切所有之法」は三千の諸法にして妙名、「如来一切自在神力」は如来の大用にして妙用、「如来一切秘要之藏」は諸法実相にして妙体、「如来一切甚深之事」は実相の因果にして妙宗、「皆於此經宣示顕説」は一經の総結にして妙教と釈している。<sup>28)</sup>したがって法華經を集約した四句要法は「名体宗用教の五重玄義」となる。日蓮聖人はこれを地涌菩薩への別付嘱の視点に立つて要法（五重玄義）即妙法蓮華經の五字、寿命品の三世益物の視点に立つて良薬（五重玄義）即南無妙法蓮華經と受け止められたのである。天台大師の五重玄義は教相的であるが、日蓮聖人の題目は教觀を相即した觀心の教であり教相の觀である。

⑤は、釈尊は仏眼をもつて未來を鑑み、諸大聖を捨棄して本化四菩薩を召出し要法を付嘱して末法の弘通を定められたことから、迦葉・阿難等はおつばら小乗經を弘通し、龍樹・無著等は權大乘經を弘通し、南岳・天台等は小大・權實・迹本二門化道始終・師弟遠近・已今当三説を立てて法華經が一代超過の經であることを述べたことを明かし、このゆえに南岳・天台は天竺の諸論や真丹の衆積よりも勝れているとし、伝教大師は仏滅後一千八百年の像法の末に日本国に生まれ、小乗・大乘・一乗諸戒等を分別し一閻浮提の内未曾有の大戒場を觀山に建立したことを論じ、このほかの三論宗の吉藏大師並びに一百人、法相宗の慈恩大師、華嚴宗の法藏・澄觀、真言宗の善無畏・金剛智・不空・

恵果、日本の弘法・慈覚等の三蔵諸師は四依の居士ではなく暗師であり愚人である、とされている。

法華経虚空会において、釈尊が未来を鑑みて大地の下から召出し要法を付嘱した本化四菩薩こそが末法の正統な弘通者であるとして、三国にわたる諸論師人師の弘法弘通史上における位置づけを示されている。

⑥は、迦葉・阿難等、龍樹・天親等、天台・伝教等の諸大聖人が知りながらいまだ弘宣しなかった「肝要の秘法」は法華経の文に明らかであり、論釈等に記載されていないことも明白である、とされている。

諸大聖人が内鑑冷然の「肝要の秘法」が、「南無妙法蓮華経の五字七字の題目」であることは本抄の文脈から明らかである。

⑦は、仏法流布の時と師について考えると、天台大師は薬王菩薩として靈山の法華経説法の会座に侍していた折に、仏が上行菩薩出現の時を予告されたのを聞いていたので、その概要を示されたのであろうと述べ、日蓮は地涌菩薩の一分ではないが、兼ねてよりこの事を知っているので地涌大菩薩の出現に先だって五字を示すのである、とされている。

「予非<sup>二</sup>地涌一分<sup>一</sup>兼知<sup>二</sup>此事<sup>一</sup>」。故前<sup>さま</sup>立<sup>た</sup>地涌之居士<sup>ごうし</sup>粗示<sup>そし</sup>五字<sup>ごじ</sup>」の表現は前掲『新尼御前御返事』の「日蓮上行菩薩にはあらねども、ほぼ兼てこれをしれるは、彼の菩薩の御計かと存て、此二十余年が間此を申」と類似している。また、他の遺文にも類似の表現が見られる。『寺泊御書』には次のように述べられている。

日蓮八十万億那由他諸菩薩為<sup>二</sup>三代官<sup>一</sup>申<sup>し</sup>之<sup>を</sup>。彼諸菩薩請<sup>二</sup>加被<sup>一</sup>者也。<sup>29)</sup>

法華経弘通の身に蒙る法難について述べ、勸持品の色読を論じる文脈から「八十万億那由他諸菩薩の代官として」と表現されている。

『本尊問答鈔』には次のように述べられている。

此御本尊は世尊説おかせ給後、二千二百三十余年が間、一閻浮提の内はまだひろめたる人候はず。漢土の天台・日本の伝教ほほしろしめして、いさ、かひろめさせ給はず。当時こそひろまらせ給べき時にあたりて候へ。経には上行・無辺行等こそ出でてひろめさせ給べしと見へて候へども、いまだ見へさせ給はず。日蓮は其人には候はねどもほほこ、ろえて候へば、地涌の菩薩の出させ給までの口ずさみに、あらあら申て況滅度後のほこさきに当候也。<sup>30)</sup>

「日蓮は其人には候はねども」と表現されている。本尊を論じる文章中であることから「あらあら申」す内容は一閻浮提の内未曾有の「本門の本尊」である。

『四條金吾殿御返事』には次のように述べられている。

末代の法華經の聖人をば何を用てかするべき。經云能説此經能持此經の人、則如来の使なり。八卷一卷一品一偈の人乃至題目を唱る人、如来の使なり。始中終すてずして大難をとをす人、如来の使なり。日蓮が心は全く如来の使にはあらず、凡夫なる故也。但三類の大怨敵にあだまれて、二度の流難に値へば、如来の御使に似たり。心は三毒ふかく、一身凡夫にて候へども、口に南無妙法蓮華經と申ば如来の使に似たり。過去を尋れば不輕菩薩に似たり。現在をとぶらうに加刀杖瓦石にたがう事なし。未來は当詣道場疑なからん歟。<sup>31)</sup>

「日蓮が心は全く如来の使にはあらず、凡夫なる故也」と表現されている。しかしながら、法華經の文のごとく「三類の大怨敵にあだまれ」「二度の流難」を体験した自身は、如説の受持者であり不輕菩薩の行軌を継承する者であることから「如来の御使い」「過去を尋れば不輕菩薩」に相似するとされている。

日蓮聖人教学における仏法の弘通 (三) (庵谷行亨)

『三澤鈔』には次のように述べられている。

日蓮は其御使にはあらざれども其の時剋あたる上、存外に此法門をさとりぬれば、聖人の出させ給までまづ序分にあらあ申なり。<sup>(32)</sup>

「日蓮は其の御使にはあらざれども」と表現されている。諸大論師・諸大人師が「知って言わざる法門」を、弘通すべき「其の時剋にあたり」「存外にさとり」しゆえに「聖人の出させ給うまでまづ序分にあらあ申すなり」とある。「大法」が流布すべき正時（末法の初め）にめぐり合わせた者の使命感を吐露されている。

弘通の内容については、『新尼御前御返事』は「今此の御本尊は」<sup>(33)</sup>の文脈の中で「法華経の本門の肝心たる妙法蓮華経の五字」<sup>(34)</sup>と続いていることから、「本門の本尊」「本門の題目」、「曾谷入道殿許御書」⑦は「五字」（本門の題目）、「本尊問答鈔」は「本門の本尊」、「四條金吾殿御返事」は値難色読の「南無妙法蓮華経」、「三澤鈔」は「まことの大事」「内々申す法門」「大法」である。末法の大法は「一大秘法」「三大秘法」であることから、「本門の本尊」「本門の題目」は共に観心法門として異なるものではない。また、「本門の本尊」「本門の題目」は共に「事行」<sup>(35)</sup>であることから、値難色読の法華経実践も末代の観心に他ならない。

「前立」<sup>(36)</sup>等の対象は、『寺泊御書』は「八十万億那由他諸菩薩」、「新尼御前御返事」は「上行菩薩」、「曾谷入道殿許御書」⑦は「地涌之大士」、「本尊問答鈔」は「上行・無辺行等の地涌の菩薩」、「四條金吾殿御返事」は「如来の使い」、「三澤鈔」は「仏の使い」「聖人」である。「聖人」の表記については『法華取要抄』に「上行等の聖人」<sup>(36)</sup>とあることから、「仏の使いである上行等の聖人」という意味が込められていることも推測される。

総じて、「前立」「あらねども」「其の人には候はねども」「其の御使にはあらざれども」等の表現は、末法当世は



地涌菩薩（上行菩薩・仏の使い・聖人）が出現して本門の大法を弘めるべき時であることから、その必然の時にあたり大法を弘通している自身の自覚と責任を内に秘めながらの謙譲であると思われるのである。

『撰時抄』には次のように述べられている。

- ① 夫仏法を学せん法は必ず先づ時をならうべし。<sup>(37)</sup>
- ② 法華経の流布の時二度あるべし。所謂在世八年、滅後には末法の始五百年なり。<sup>(38)</sup>
- ③ 龍樹・天親等は内心には存ぜさせ給とはいえども言には此義を宣給はず。求云、いかなる故にか宣給ざるや。答云、多の故あり。一には彼時には機なし、二には時なし、三には迹化なれば付嘱せられ給はず。<sup>(39)</sup>
- ④ 伝教大師は其功を論ずれば龍樹・天親にもこえ、天台・妙楽にも勝てをはします聖人なり。<sup>(40)</sup>
- ⑤ 大集経の白法隱没の時に次で、法華経の大白法の日本国並に一閻浮提に広宣流布せん事も疑うべからざるか。（略）後五百歳に一切の仏法の滅せん時、上行菩薩に妙法蓮華経の五字をもたしめて謗法一闡提の（略）輩の良薬とせんと、（略）大地は反覆すとも、高山は頽落すとも、春の後に夏は来すとも、日は東へかへるとも、月は地に落とも此事は一定なるべし。<sup>(41)</sup>
- ⑥ 馬鳴・龍樹・提婆・無著等も正法一千年の内にこそ出現せさせ給へ。天親菩薩は千部の論師（略）已上正法なり。像法に入ては天台大師像法の半に漢土に出現して玄と文と止との三十卷を造て法華経の淵底を極たり。像法の末に伝教大師日本に出現して天台大師の円慧円定の二法を我朝に弘通せしむるのみならず、円頓の大戒場叡山に建立して日本一州皆同く円戒の地になして、上一人より下万民まで延暦寺を師範と仰がせ給は、豈に像法の時法華経の広宣流布にあらずや。<sup>(42)</sup>

⑦ 伝教大師は日本国の土也。桓武の御宇に出世して欽明より二百余年が間の邪義をなんじやぶり、天台大師の円慧円定を撰し給のみならず、鑑真和尚の弘通せし日本小乗の三処の戒壇なんじやぶり、叡山円頓の大乗別受戒を建立せり。此の大事は仏滅後一千八百年が間の身毒・尸那・扶桑乃至一閻浮提第一の奇事なり。内証は龍樹天台等には或は劣にもや、或は同くもやあるらん。仏法の人をすべ(統)て一法となせる事は、龍樹・天親にもこえ、南岳・天台にもすぐれて見えさせ給なり。惣じては如来御入滅後一千八百年が間、此二人こそ法華經の行者にてはをはずれ。<sup>(43)</sup>

⑧ 迦葉・阿難等の弘通せざる大法、馬鳴・龍樹・提婆・天親等の弘通せる事、前の難に顕たり。又龍樹・天親等の流布し残給る大法、天台大師の弘通し給事又難にあらわれぬ。又天台智者大師の弘通し給はざる円頓の大戒、伝教大師の建立せさせ給事又顕然也。(略) 仏滅後に迦葉・阿難・馬鳴・龍樹・無著・天親乃至天台・伝教のいまだ弘通しませぬ最大の深秘の正法、経文の面に現前なり。此深法今末法の始、五五百歳に一閻浮提に広宣流布すべきやの事不審無極なり。問、いかなる秘法ぞ。先名をきき、次に義をきかんとをもう。此事もし実事ならば釈尊の二度世に出現し給か。上行菩薩の重涌出せるか。<sup>(44)</sup>

①は、仏法を修学するには時期を知ることが重要であることを説いたもので、三国仏法流布の歴史を叙述しようとする『撰時抄』全体の主旨を示されている。

教は仏の意思であることから、いかなる教えが、いつ(時)、どのような場所(国)で、どのような人々(機)に対して、仏の意思を担っただれ(師)によって流布されるかが、教によって決定される。仏法の流布は仏の意思である教をどのように信受するかにかかっていると云っても過言ではない。

時は時間の流れであり、社会において歴史を構築していく。歴史を形成する時の本質は機（衆生。人々）と国（国土。社会）であり、その時をいかなる歴史にするかは仏の意思を担った師の役割に負うところが大きい。

②は、法華經流布の時について、「在世八年」と「末法の始五百年」とされている。釈尊の靈山說法は「在世の法華經」、末法の初めの法華經は「本門の法華經」であり、同じ「法華經流布の時」でも時代によってその内容は異なる。『觀心本尊抄』には次のように述べられている。

以三本門論之一向以三末法之初為三正機。(略) 本門序正流通俱以三末法之始為三證。在世本門末法之初一同純円也。但彼脱此種也。彼一品二半此但題目五字也。<sup>(45)</sup>

本門の視点に立てば、「末法之初」こそが正時であり正機であることから、末法今時は下種の題目であるとされている。

③は、正法時の龍樹・天親等が内鑑冷然で外には宣べなかつたことについて、その理由を「機なし」「時なし」「付嘱なし」と三点が挙げられている。正法時は本門の教が指示する機・時・師ではないことを意味している。

④は、正法時の龍樹・天親等よりも像法末時の伝教大師のほうが勝れた聖人であるとされている。時の推移と共に悪逆者が増大することから弘法には難儀が伴うのみならず、弘める法もますます深くなるからである。

⑤は、後五百歳の法滅時に上行菩薩が妙法蓮華經の五字を流布することは、いかなることがあっても「一定」であると、確信をもって明言されている。

⑥は、正法時の馬鳴・龍樹・提婆・無著・天親等の論師、像法時前半の天台大師の功績を挙げ、さらに像法時末の伝教大師が「天台大師の円慧円定の二法」の弘通のみならず、「円頓の大戒場を觀山に建立して日本一州皆同く円戒の

地」としたことの功績を「あに像法時の法華經の広宣流布にあらずや」と称賛されている。

⑦は、前の⑥と関連し、伝教大師の功績を「龍樹・天親にもこえ、南岳・天台にもすぐれて見えさせ給なり」と称賛し、天台大師・伝教大師の「二人こそ法華經の行者にてはをはずれ」と述べられている。

⑧は、正法時前五百年に出現する迦葉・阿難等の仏弟子、正法時後五百年に出現する馬鳴・龍樹・提婆・天親等の論師、像法時前半に出現する天台大師、像法時末に出現する伝教大師が未弘通の「最大の深秘の正法」が「一閻浮提に広宣流布」することについて言及し、その「秘法」について問いを立てておられる。

正像末三時と能弘の師についての表記は、「遣使還告」に関して四依を論じた『觀心本尊抄』⑤と類似している。正法時前五百年の仏弟子は小乗の四依、正法時後五百年の論師は大乗の四依、像法時の天台大師・伝教大師は迹門の四依である。『觀心本尊抄』『法華取要抄』等の意によって積すると、末法時の初めには本門の四依である上行菩薩が必ず出現して「最大の深秘の正法」である五重玄の「南無妙法蓮華經」を広宣流布することになる。

『高橋入道御返事』には次のように述べられている。

大地の底より上行菩薩と申せし老人を召いだして、多宝仏・十方の諸仏の御前にして、釈迦如来七宝の塔中にして、妙法蓮華經の五字を上行菩薩にゆづり給。其故は我が滅後の一切衆生は皆我子也。いづれも平等に不便にをもうなり。しかれども医師の習病に随て薬をさづくる事なれば、我滅後五百年が間は迦葉・阿難等に小乗經の薬をもて一切衆生にあたへよ。次の五百年が間は文殊師利菩薩・弥勒菩薩・龍樹菩薩・天親菩薩等華嚴經・大日經・般若經等の薬を一切衆生にさづけよ。我滅後一千年すぎて像法の時には薬王菩薩・觀世音菩薩等、法華經の題目を除て余の法門の薬を一切衆生にさづけよ。末法に入らば迦葉・阿難等、文殊・弥勒菩薩等、薬王・觀音等のゆ

づられしところの小乗経・大乘経並に法華経は文字はありとも衆生の病の薬とはなるべからず。所謂病は重し薬はあさし。其時上行菩薩出現して妙法蓮華経の五字を一閻浮提の一切衆生にさづくべし。其時一切衆生此の菩薩をかたきとせん。<sup>(46)</sup>

時によつて所弘の法と能弘の師が異なることを示されている。仏滅後正法時前五百年は仏弟子が「小乗経の薬」、正法時後五百年は菩薩・論師が「諸大乘経の薬」、像法時は諸菩薩が「余の法門（権大乘経）の薬」、末法時は上行菩薩が「妙法蓮華経の五字」の良薬をもつて「一閻浮提の一切衆生」に授与するとされている。

『報恩抄』には次のように述べられている。

①付法蔵の人々は四依の菩薩、仏の御使なり。<sup>(47)</sup>

②仏滅後一千五百年にあたりて、月氏よりは東に漢土といふ国あり。陳・隋の代に天台大師出世す。此人の云、如来の聖教に大あり小あり、顕あり密あり、権あり実あり。迦葉・阿難等は一向に小を弘、馬鳴・龍樹・無著・天親等は権大乘を弘て、実大乘の法華経をば或は但指をさして義をかくし、或は経の面をのべて始中終をのべず。或は迹門をのべて本門をあらはさず。或は本迹あつて観心なしといひしかば、南三北七の十流が末、数千万人時をつくりどつとわらふ。(略) 月氏の大論師龍樹・天親等の数百人の四依の菩薩もいまだ実義をのべ給はずといふなり。<sup>(48)</sup>

③内証は同けれども、法の流布は迦葉・阿難よりも馬鳴・龍樹等はすぐれ、馬鳴等よりも天台はすぐれ、天台よりも伝教は超させ給たり。世末になれば、人の智はあさく仏教はふかくなる事なり。例せば軽病は凡薬、重病には仙薬、弱人には強きかたうど（方人）有て扶るこれなり。問云、天台伝教の弘通し給ざる正法ありや。答云、有。

求云、何物乎。答云、三あり。末法のために仏留置給。迦葉・阿難等、馬鳴・龍樹等、天台・伝教等の弘通せさせ給はざる正法なり。求云、其形貌如何。答云、一は日本乃至一閻浮提一同に本門の教主釈尊を本尊とすべし。所謂宝塔の内の釈迦多宝、外の諸仏、並に上行等の四菩薩脇士となるべし。二には本門の戒壇。三には日本乃至漢土月氏一閻浮提に人ごとに有智無智をきはらず、一同に他事をすてて南無妙法蓮華經と唱べし。此事いまだひろまらず。一閻浮提の内に仏滅後二千二百二十五年が間、一人も唱えず。日蓮一人南無妙法蓮華經・南無妙法蓮華經等と声をしませず唱るなり。(略) 日蓮が慈悲曠大ならば、南無妙法蓮華經は万年の外未來までもながるべし。日本国の一切衆生の盲目をひらける功德あり。無間地獄の道をふさぎぬ。此功德は伝教天台にも超へ、龍樹・迦葉にもすぐれたり。<sup>49)</sup>

①は、『付法藏因縁伝』により、付法藏の人々は「四依の菩薩」であり「仏の御使い」であるとし、その後の文に三国(天竺・漢土・日本)の三時(正法・像法・末法)にわたる諸論師人師の弘法・値難の事例が挙げられている。

②は、像法時に出現した天台大師の功績を述べたものである。「迦葉・阿難等の仏弟子は一向に小乗、馬鳴・龍樹・無著・天親等の論師は権大乘を弘めて実大乘の法華經は内鑑冷然である」との説を、天台大師の言葉として挙げられている。

③は、時代の推移と共に機根が悪化するために弘法は困難を伴うとして、迦葉・阿難等の仏弟子よりも馬鳴・龍樹等の論師、論師よりも天台、天台よりも伝教は勝れるとされている。さらに末法の初めの弘法を問題とし、天台・伝教末弘の正法として「本門の本尊」「本門の戒壇」「南無妙法蓮華經」(本門の題目)を挙げられている。「末法の正法」として三大秘法を挙げ、これを受けて「一同に他事をすてて南無妙法蓮華經と唱べし」「日蓮一人南無妙法蓮華經・南

無妙法蓮華經等と声もをしまし唱るなり」「南無妙法蓮華經は万年の外未來までもながるべし」と題目の一大秘法に結ばれている。

『下山御消息』には次のように述べられている。

如来は未來を鑑させ給て、我滅後正法一千年・像法一千年・末法一万年が間、我法門を弘通すべき人々並に經々を一一にきりあてられて候。而に此を背人世に出来せば、設智者賢主なりとも用べからず。所謂我滅後次日より五百年が間は一向小乘經を弘通すべし。迦葉・阿難乃至富那奢等の十余人也。後の五百余年は權大乘經所謂華嚴・方等・深密・大日經・般若・觀經・阿弥陀經等を、馬鳴菩薩・龍樹菩薩・無著菩薩・天親菩薩等の四依の大菩薩大論師弘通すべし。而に此等の阿羅漢並大論師は法華經の深義を知識するには有ず。然而流布の時も来らず、釈尊よりも仰つけられざる大法なれば、心には存給ども、口には宣給はず。或は粗口に囀給やうなれども、實義をば一向に隠て止めぬ。像法一千年が内に入ぬれば月氏の仏法漸く漢土・日本に渡来る。世尊、眼前に藥王菩薩等の迹化他方の大菩薩に、法華經の半分迹門十四品を讓給。これは又地涌の大菩薩、末法の初に出現せさせ給て、本門寿命品の肝心たる南無妙法蓮華經の五字を、一閻浮提の一切衆生に唱させ給べき先序のため也。所謂迹門弘通の衆は南岳・天台・妙樂・伝教等は也。今の時は世すでに上行菩薩等の御出現の時剋に相当れり。而に余愚眼を以てこれを見に、先相すでにあらはれたる歟。<sup>30)</sup>

如来は滅後の未來を鑑み、弘通の時、能弘の師、所弘の法を定められたとし、正像末三時における人・法を挙げられている。そして末法の「今の時」は「上行菩薩等が出現」して「本門寿命品の肝心たる南無妙法蓮華經の五字」を弘めるべき「時剋」であるとされている。

日蓮聖人教学における仏法の弘通 (三) (庵谷行亨)

『三澤鈔』には次のように述べられている。

法門の事はさど (佐渡) の国へながされ候し已前の法門は、ただ仏の爾前の経とをほしめせ。(略) 我につきたりし者どもに、まことの事をいわ (言) ざりける、とをも (思) てさどの国より弟子どもに内々申法門あり。此は仏より後迦葉・阿難・龍樹・天親・天台・妙楽・伝教・義真等の大論師大人師は知てしかも御心の中に秘せさせ給し、口より外には出給はず。其故は仏制して云く、我滅後末法に入らずば此大法いうべからずとありしゆへなり。日蓮は其御使にはあらざれども其の時剋あたる上、存外に此法門をさとりぬれば、聖人の出させ給までまづ序分にあら申なり。(略) 但此大法耳一閻浮提に流布すべしとみへて候。<sup>(5)</sup>

日蓮聖人は自身の法門について、佐渡以前は仏の爾前経と同じであり、佐渡以後は「まことの事」「内々申法門」「先師未弘の大法」であるとされている。文永八年の一連の値難が日蓮聖人の法門に多大な意義を与えたことを意味している。

『断簡一』には次のように述べられている。

南北并に三論法相等の宗々の人師料簡等云、龍樹天親の論には法華経の実義を尽せり。天台云、心に存給とも論にはいまだ尽ず。真言師弘法等云、龍樹菩薩は顕密の元祖、顕論は仏意を尽ず。蜜論に尽等云云。今日本学者等此義に迷惑せり。粗漢土日本の人師の釈を見るに、天台独此事をえたまえり。<sup>(32)</sup>

龍樹・天親の論師が「法華経の実義を尽したか否か」について、南三北七の諸家や諸宗の人師の説と天台大師の主張との相違を述べて、「心に存給とも論にはいまだ尽ず」とする天台大師の見解を「独此事をえたまえり」と称賛し、天台大師の正しさを論じられている。



二九四『富木入道殿御返事』には次のように述べられている。

今本門と迹門とは教主すでに久始のかわりめ、百歳のをきなと一歳の幼子のごとし。弟子又水火也。土の先後い  
うばかりなし。而を本迹を混合すれば水火を弁ざる者也。而を仏は分明に説分給れども仏の御入滅より今に二千  
余年が間、三国並一閻浮提の内分明に分たる人なし。但、漢土の天台、日本の伝教、此二人計こそ粗分給て候へ  
ども、本門と迹門との大事に円戒いまだ分明ならず。詮ずる処は天台と伝教とは内には鑑給といへども、一には  
時来らず、二機なし、三譲られ給はざる故也。今末法に入ぬ。地涌出現して弘通有べき事なり。今末法に入て本  
門のひろまらせ給べきには、小乗・権大乘・迹門の人々、設科なくとも彼々の法にては験有べからず。<sup>(33)</sup>

仏法における本迹と時代による弘通について明確に分別することの必要性を説き、天台大師と伝教大師とは内鑑冷  
然であるとし、両師未弘の理由を「時来らず」「機なし」「譲られず」との三点を挙げ、「今末法に入ぬ」ゆえに「地涌  
菩薩が出現」して「本門」を「弘通」すべきであるとされている。「今末法」こそは時・機・譲与・師が調った必然の  
時であるとの教示である。

三一〇『富木入道殿御返事』には次のように述べられている。

於此法門如来滅後月氏一千五百余年、付法蔵の二十四人・龍樹・天親等知て未<sub>レ</sub>顯<sub>レ</sub>此。漢土一千余年の余人も  
未<sub>レ</sub>知<sub>レ</sub>之。但天台妙楽等粗演<sub>レ</sub>之。雖<sub>レ</sub>然未<sub>レ</sub>顯<sub>レ</sub>其実義<sub>レ</sub>歟。伝教大師以如<sub>レ</sub>是。(略)日蓮が法門は第三の法門也。  
世間粗如<sub>レ</sub>夢一二をば申ども、第三不<sub>レ</sub>申候。第三法門は天台・妙楽・伝教も粗示<sub>レ</sub>之未<sub>レ</sub>事了<sub>一</sub>。所詮讓<sub>二</sub>与末法之  
今<sub>一</sub>也。五々百歳は是也。<sup>(34)</sup>

「日蓮が法門」は、仏滅後、付法蔵の諸論師人師も顯さず、漢土の人々も知らず、天台大師・妙楽大師・伝教大師等

は説いても実義を顕すこともなく、「末法の今」に「譲与」された「第三の法門」である、とされている。

「第三の法門」とは天台大師が『法華玄義』巻一に説いた三種教相の内の第三「師弟の遠近不遠近の相」を指すが、ここではそれだけにとどまらず「末法有縁の本門法門」「師弟俱に久遠の本門法門」「本仏の付嘱を受けた本弟子が本法を末法の初めに流布すべき必然性を明かす本門法門」などの意味が込められている。

『随自意御書』には次のように述べられている。

仏の御入滅次の日より一千年をば正法と申。この正法一千年を二にわかつ。前の五百年が間は小乗経ひろまらせ給。ひろめし人々は迦葉・阿難等なり。後の五百年は馬鳴・龍樹・無著・天親等、権大乘経弘通せさせ給。法華経をばかたはし計かける論師もあり。又つやつや申いださぬ人もあり。正法一千年より後の論師の中には、少分は仏説にいたれども、多分をあやまりあり。あやまりなくして而もたらざるは迦葉・阿難・馬鳴・龍樹・無著・天親等なり。<sup>55)</sup>

正像末における法と人を挙げたもので、正法前半五百年間は迦葉・阿難等が小乗経、後半五百年間は馬鳴・龍樹・無著・天親等が権大乘経を弘通したとし、実大乘経である法華経の顕説については不十分であった、とされている。『四條金吾殿御返事』には次のように述べられている。

我も聖人、我も賢人とは申せども、況滅度後の記文に値る人一人も候はず。龍樹菩薩・天台・伝教こそ仏法の大難に値人々にては候へども、此等も仏説には及事なし。此即代のあが(上)り、法華経の時に生値はせ給はざる故也。今は時すでに後五百歳末法の始也。日には五月十五日、月には八月十五夜に似たり。天台伝教は先に生給へり。今より後は又のちぐへ(後悔)なり。大陣すでに破ぬ。余党物のかずならず。今こそ仏記しをさ給し後五

百歳、末法の初、況滅度後の時に当て候へば、仏語むなしからずば、一閻浮提の内に定て聖人出現して候らん。聖人の出るしるしには、一閻浮提第一の合戦をこるべしと説れて候に、すでに合戦も起て候に、すでに聖人や一閻浮提の内に出させ給て候らん。(略) 末代の法華經の聖人をば何を用てかするべき。經云能説此經能持此經の人、則如来の使なり。八卷一卷一品一偈の人乃至題目を唱る人、如来の使なり。始中終すてずして大難をとす人、如来の使なり。日蓮が心は全く如来の使にはあらず、凡夫なる故也。但三類の大怨敵にあだまれて、二度の流難に値へば、如来の御使に似たり。心は三毒ふかく、一身凡夫にて候へども、口に南無妙法蓮華經と申ば如来の使に似たり。過去を尋れば不輕菩薩に似たり。<sup>36)</sup>

如来滅後の法華經弘通が大難と共にあることは「況滅度後の記文」をはじめとして經文に繰り返して説かれておりである。「後五百歳末法の始」の今時こそ「聖人」が出現して題目「南無妙法蓮華經」を弘通するとして、「三類の大怨敵にあだまれて、二度の流難に値」つた自身を「如来の御使いに似たり」「不輕菩薩に似たり」と表現されている。

『聖人御難事』には次のように述べられている。

況滅度後の大難は龍樹・天親・天台・伝教いまだ値給はず。(略) 而日蓮二十七年が間、弘長元年辛酉五月十二日には伊豆国へ流罪。文永元年甲子十一月十一日頭にきず(疵) 左の手を打をらる。同文永八年辛未九月十二日佐渡の国へ配流、又頭の座に望。其外に弟子を殺れ、切れ、追出、くわれう(過料) 等かずをしらず。仏の大難には及か勝たるか其は知ず。龍樹・天親・天台・伝教は余に肩を並がたし。日蓮末法に出ずば仏は大妄語人、多宝十方の諸仏は大妄語の証明なり。仏滅後二千二百二十余年が間、一閻浮提の内に仏の御言を助たる人但日蓮一人

日蓮聖人教学における仏法の弘通 (三) (庵谷行亨)

なり。<sup>37)</sup>

龍樹・天親・天台・伝教等の先師は「沉滅度後の大難」には値わないが、日蓮は「二十七年が間」数々の大難に遭遇してきたことを示し、日蓮が末法に出現しなければ「仏は大妄語の人」「多宝如来十方諸仏の証明も大妄語」となるとして、「仏の御言を助たる人」は「但日蓮一人なり」とされている。虚空会において三仏と約束した本化上行菩薩の行軌を担い、大難を蒙りながら末法時に出現して要法の題目を弘通する自身の立場を強く意識した表現になっている。

『瀧泉寺申状』には次のように述べられている。

大覚世尊遙鑑<sup>三</sup>末法鬪諍堅固之時<sup>二</sup>可<sup>レ</sup>対<sup>三</sup>治如<sup>レ</sup>此大難<sup>二</sup>之秘術所<sup>三</sup>説置<sup>二</sup>之<sup>一</sup>經文明々。雖<sup>レ</sup>然如来滅後二千二百二十余年之間身毒・尸那・扶桑等一閻浮提内未<sup>三</sup>流布<sup>一</sup>。随四依大士内鑑不<sup>レ</sup>説天台<sup>三</sup>傳教而不<sup>レ</sup>演時未<sup>レ</sup>至之故<sup>38)</sup>。

仏は「末法鬪諍堅固」の大難の時代を鑑みて「対治の秘術」を説き示されたが、如来滅後今に至るまで誰一人として明らかにした者はいない、として、時が至らなかつたゆえに四依の大士は内に鑑みて説かず、天台・伝教も宣べていない、とされている。

### 三 ちよび

#### 1 弘通の時・能弘の師・所弘の法の関係性

日蓮聖人は、仏滅後における弘通の時・能弘の師・所弘の法の関係性について次のように見ておられた。

如来は滅後の未来を鑑み、弘通の時・能弘の師・所弘の法を定められた。時は正像末三時、師は四依の菩薩、法は小乗・権大乘・実大乘・本門大法である。したがって、仏法を弘通するためには時代における能弘の師と所弘の法を

正しく見極めなければならない。

仏法流布の歴史を辿ると、正法時の前半五百年間は迦葉・阿難等が小乗経、後半五百年間は馬鳴・龍樹・無著・天親等が権大乘経、像法時は天台大師・伝教大師等が実大乘経である法華経を弘通した。なお、正法時の後半五百年間に出た馬鳴・龍樹・無著・天親等は少しは実大乘経を弘通したがその内容は十分なものではなかった。

このように、仏滅後における仏法の流布には、未来を鑑みた如来の意思が存在し、弘通の時・能弘の師・所弘の法が如来の未来記として必然付けられている。

## 2 正法時の前五百年

正法時の前五百年は小乗の四依である迦葉・阿難等の仏弟子をはじめ商那和修・末田地・脇比丘等の付法蔵の人々が小乗の教えを弘めた。日蓮聖人はこれを「小乗の薬で衆生の軽病を対治」したと表現し、「小乗の釈尊等の寺塔を建立」した時代とされている。

## 3 正法時の後五百年

正法時の後五百年は大乘の四依である龍樹・天親等の論師が権大乘を弘めた。これらの論師は、実大乘の法華経については「知って言わず」、あるいは「迹門の一分」を宣べ「本門と観心」とを言わずとして、これを天台大師の『摩訶止観』の釈を承けて「内鑑冷然」と表現されている。あるいは、龍樹は「迹門を談宣」し、天親は「化道の始終を明かさず」とも述べられている。日蓮聖人はこれらの教化を「諸大乘経の中薬で衆生の中病を対治」したと表現し、「権大乘の釈尊等の寺塔を建立」した時代とされている。

諸論師が実大乘について「内鑑冷然」であったことこの理由としては「時いまだ至らず」のゆえとされている。また、

そのことは、南三北七の諸家や諸宗の人師は知らず、天台大師のみが「独りこの事をえたまえり」とされている。

また、仏法の弘通については、正法時の四依は像法時の天台大師・伝教大師等には及ばないとされている。

#### 4 像法時

像法時一千年は迹門の四依である天台大師・伝教大師等が実大乘の法華経を弘めた。特に像法時五百年には天台大師が教門の五時八教（慧学・円慧）と観門の一念三千（定学・円定）、像法時八百年には伝教大師が日本に円宗を弘めて定慧を明らかにし円頓戒（戒学・円戒）を弘宣した。これによって、円の三学が具備したのである。

ただし、天台大師・伝教大師等の弘通は迹面本裏（理具）の法華経であり、「本門の大法」は「時来らず」「機なし」「譲られず」（付嘱されず）の理由によって弘められることはなかった。この時代の信仰については「迹門の釈尊等の寺塔の建立」とされている。

#### 5 末法時の初め

末法時の初めは本門の四依である地涌菩薩が「本門の大法」を弘める。末法の時代は悪世であり、法華経誹謗者が充満している。このような機根を、经文によって「末代幼稚」「失本心者」と表現し、「病子」「重病者」に譬える。

謗法の重病者を治癒するためには妙法（妙薬）でなければならぬ。日蓮聖人は、「是好良薬」とは「寿命品の肝要たる名体宗用教の南無妙法蓮華経」であるとされている。末法時における教化は、上行菩薩が「妙法蓮華経の五字の良薬」をもって「一閻浮提の一切衆生」に授与する。

また、末法時における謗法者教導は、逆縁教化のために題目をもって下種する。題目は久遠釈尊の因果であることから「本因本果」であり、そこに「真の十界互具」「真の一念三千」が成就する。「真の一念三千」は釈尊と信行者と

が感応した「本門寿命品文底の法門」である。文底観心は題目受持に成就することから受持の信に「一念三千仏種の義が成り立つ。したがって、末法時における謗法者教化は逆縁下種の題目でなければならぬ。

日蓮聖人は教法（法門）について叙述されることが多い。末法に流布されるべき「大法」に関しては次のような表記が見られる。「法華經の題目」「法華經の肝要」「要法」「肝心」「肝要の法」「五字」「妙法五字」「題目の五字」「妙法蓮華經の五字」「妙法蓮華經の七字五字」「南無妙法蓮華經」「南無妙法蓮華經の五字」「南無妙法蓮華經の七字」「本門寿命品の肝心たる南無妙法蓮華經の五字」「妙法蓮華經の五字名体宗用教の五重玄」「本門」「本門寿命品」「寿命品の肝要」「寿命品の肝心」「内証の寿命品」「本門寿命品の肝心」「本門寿命品の文底」「本門の大法」「本門の肝心」「秘法」「肝要の秘法」「先師未弘の秘法」「先師未弘の大法」「観心の法門」「大白法」「正法」「末法の正法」「一大秘法」「本門の三学」「本門の三法門」「まことの大事」「内々申す法門」「一期の大事」「当身の大事」「本門寿命品の本尊並びに四大菩薩」「事行の南無妙法蓮華經の五字並びに本門の本尊」「寿命品の仏と肝要の五字」「本門の本尊と四菩薩と戒壇と南無妙法蓮華經の五字」「本門の本尊と戒壇と題目の五字」「本門の本尊・本門の戒壇・南無妙法蓮華經」。

日蓮聖人は、このように多様な表現で末法時に弘通されるべき「本門の大法」について述べられている。久遠釈尊の因果であり一代聖教の肝心である一大秘法（題目「南無妙法蓮華經」）は、「事行の法門」としての三大秘法（本門の本尊・本門の戒壇・本門の題目）である。

能弘の師については、『観心本尊抄』に「遣使還告は地涌菩薩である」とされている。その理由は、地涌菩薩は娑婆世界に久住し、釈尊の久遠来の初発心の弟子で、娑婆世界で最初に下種された菩薩であることから、他の諸大菩薩よ

りも宿縁がはるかに超過しているからである。

末法時においては、神力品における「付嘱の大事」(虚空会における仏滅後弘教の別付嘱)を実現するために、本弟子地涌菩薩が出現し、要法の題目を弘通するのである。

末法の四依である地涌菩薩には上首四菩薩がある。日蓮聖人遺文において、末法能弘の師を最上首である上行菩薩に特化されるのは文永十一年(一二七四)の頃からである。『法華取要抄』には「日蓮捨「広略」好「肝要」。所謂上行菩薩所伝妙法蓮華経五字也」と述べられている。同年の一二月に凶顕された大曼荼羅には「後五百歳之時、上行菩薩出現世始弘宣之」とある。その後、翌文永十二年(一二七五)二月一六日の『新尼御前御返事』には「上行菩薩等を涌出品に召出させ給て、法華経の本門の肝心たる妙法蓮華経の五字をゆづらせ給て」、同年三月一〇日の『曾谷入道殿許御書』には「予情案三事之情二大師於三薬王菩薩一待三於靈山会上二仏上行菩薩出現之時兼記之故粗諭之歎」、建治元年(一二七五)六月の『撰時抄』には「後五百歳に一切の仏法の滅せん時、上行菩薩に妙法蓮華経の五字をもたしめて、同年七月一二日の『高橋入道御返事』には「大地の底より上行菩薩と申せし老人を召いだして、(略)妙法蓮華経の五字を上行菩薩にゆづり給」「上行菩薩出現して妙法蓮華経の五字を一閻浮提の一切衆生にさづくべし」、建治三年(一二七七)六月の『下山御消息』には「今の時は世すでに上行菩薩等の御出現の時剋に相当れり」等と叙述されている。このように、末法時の能弘の師については、文永一〇年(一二七三)の『観心本尊抄』に「地涌菩薩」「四菩薩」と表明され、翌文永十一年(一二七四)以降は「上行菩薩」と表現されることが多くなっていく。

龍樹・天親・天台・伝教等の論師人師が「本門の大法」を弘めなかつた理由としては「不授与」「時機未熟」などが指摘されている。「不授与」は法華経虚空会の「付嘱の儀」により、「時機未熟」は法華経を「流通分の心」で受け止



める末法為正の法華經觀に立脚するものである。

このような仏法弘通の次第を明らかにした者は、「如来滅後から今に至るまで誰一人としていない」として、自身の忍難弘教を辿り、「日蓮が末法に出現しなければ仏は大妄語の人となり、多宝如来十方諸仏の証明も大妄語となる」として、「仏の御言を助たる人」は「但日蓮一人なり」とされている。それは、法華經弘通に蒙った法難は、自身が「眞の法華經の行者」であることを証明すると共に、釈尊の御意に参入して釈尊の意思を実現せんとしたことにおいて、自身が「釈尊の眞実」を証明したとの法悦である。その意味において、自身を「如来の御使いに似たり」「不輕菩薩に似たり」と表現し、値難色読の事実をもって天台大師・伝教大師をも超えたとされている。このような忍難慈勝の認識は、「法華經に説き入れられた」との自覚の中でこそ涌き出た感応の境界であると思われるのである。

以上のとおり、日蓮聖人は仏法流布の次第を釈尊の未來記として受け止められた。

時は正像末の三時に区分し、特に末法今時こそが釈尊の御本意が実現されるべき時であるとされた。法華經法師品の「況滅度後」、分別功德品の「惡世末法時」、藥王菩薩本事品の「我滅度後後五百歲中広宣流布於閻浮提無令断絶」、普賢菩薩勸発品の「於如来滅度後閻浮提内広令流布使不断絶」、大集經の五箇五百歲説等の經説に立脚して、末法為正の視点から「末法の初め」を正時（まさにその時。大法が弘まるべき時。釈尊の慈悲が偏重の時。題目の良薬によって救われるべき時）とされたのである。

能弘の師は涅槃經の人四依に立脚し、法華經をはじめ摩耶經・大悲經・付法藏經（『付法藏因縁伝』）等の經説と三國にわたる仏法伝弘の歴史を辿り、仏弟子・論師・人師を正像末の三時に配当されている。特に末法今時の師は法華

經の別付嘱に則り「上行菩薩(地涌菩薩)」とされている。

所弘の法は三国の三時にわたる仏法伝弘の事実と法華經本門の教相から、小乘經・權大乘經・実大乘經、そして本門の大法とし、特に末法今時は本門寿命品文底の大法(一大秘法・三大秘法)が弘まるとされている。

法華仏教については、正法時の後五百年の龍樹・天親は内鑑冷然、像法時の天台大師・伝教大師は迹面本裏の理具、末法の初めの本化上行菩薩は本門事行である。天台大師は円の慧学と円の定学、伝教大師はそれに円の戒学を具備した。それに対し日蓮聖人は本門の三学を弘宣された。それが「本門の三法門」「末法の正法」である三大秘法である。天台大師・伝教大師の「円の三学」は個人的・観念的修行であるに対し、日蓮聖人の「本門の三学」は社会的・実践的修行である。

このように、日蓮聖人は、末法の初めの今時においては、本化上行菩薩(地涌菩薩)が必ず出現して本門の大法を弘宣することを確信されていたのである。

註

- (1) 『昭定』二二二四頁・真。
- (2) 『昭定』五三九頁・曾。
- (3) 『昭定』七〇八頁・真。
- (4) 『昭定』七〇九頁・真。
- (5) 『昭定』七〇九〜七一〇頁・真。
- (6) 『昭定』七二三頁・真。
- (7) 『昭定』七一六〜七一七頁・真。

- (8) 『昭定』 七一八〜七一九頁・真。
- (9) 『昭定』 七一九〜七二〇頁・真。
- (10) 『昭定』 五四〇・五八〇頁・曾。
- (11) 『昭定』 八九八頁・真。
- (12) 『昭定』 一〇二五頁・真。
- (13) 『昭定』 七四三〜七四四頁・真。
- (14) 『昭定』 七四七〜七四八頁・写。
- (15) 『昭定』 七七〇〜七七二頁・断。
- (16) 『昭定』 七九七頁・真。
- (17) 『昭定』 七九八〜七九九頁・真。
- (18) 『昭定』 八一五〜八一六頁・真。
- (19) 『昭定』 八六七〜八六八頁・断。
- (20) 『昭定』 八九五頁・真。
- (21) 『昭定』 八九七頁・真。
- (22) 『昭定』 八九八頁・真。
- (23) 『昭定』 九〇二〜九〇三頁・真。
- (24) 『昭定』 九〇四〜九〇五頁・真。
- (25) 『昭定』 九〇八頁・真。
- (26) 『昭定』 九一〇頁・真。
- (27) 仏種には理性と生滅の二義がある。理性仏種(性種)は理的遍在であることから生ずることも滅することもない。生滅  
 仏種(乗種)は信不信の行業によることから断滅生起がある。
- (28) 『正蔵』 第三四卷一四二頁a。原漢文。
- (29) 『昭定』 五一五頁・真。

- (30) 『昭定』 一五八六頁・写。
- (31) 『昭定』 一六六八頁・曾。
- (32) 『昭定』 一四四七頁・真蹟影写本・写。
- (33) 『昭定』 八六六〜八六七頁・断。
- (34) 『昭定』 八六七頁・断。
- (35) 『事行南無妙法蓮華經五字並本門本尊』 『昭定』 七一九頁・真。
- (36) 『昭定』 八一八頁・真。
- (37) 『昭定』 一〇〇三頁・真。
- (38) 『昭定』 一〇〇九頁・真。
- (39) 『昭定』 一〇〇九〜一〇一〇頁・真。
- (40) 『昭定』 一〇一五頁・真。
- (41) 『昭定』 一〇一七頁・真。
- (42) 『昭定』 一〇二〇頁・真。
- (43) 『昭定』 一〇二六〜一〇二七頁・真。
- (44) 『昭定』 一〇二九頁・真。
- (45) 『昭定』 七一五頁・真。
- (46) 『昭定』 一〇八四〜一〇八五頁・断。
- (47) 『昭定』 一一九九頁・曾・断。
- (48) 『昭定』 一二四六頁・曾・断。
- (49) 『昭定』 一二四七〜一二四九頁・曾・断。
- (50) 『昭定』 一三一六〜一三七七頁・断・写。
- (51) 『昭定』 一四四六〜一四四七頁・真蹟影写本・写。
- (52) 『昭定』 二四七七頁・断簡。建治年間。

- (53) 『昭定』 一五八～一五九頁・真。
- (54) 『昭定』 一五八九～一五九〇頁・真。
- (55) 『昭定』 一六一二頁・真。
- (56) 『昭定』 一六六七～一六六八頁・曾。
- (57) 『昭定』 一六七二～一六七三頁・真。
- (58) 『昭定』 一六七八頁・真・写。

一 日蓮聖人遺文は立正大学日蓮教学研究所編『昭和定本日蓮聖人遺文』（身延山久遠寺発行）による。

二 日蓮聖人遺文の真蹟・写本等については次のとおり表記した。

真 真蹟現存遺文

曾 真蹟曾存遺文

断 真蹟断片現存遺文

断簡 真蹟断簡現存遺文

写 直弟写本現存遺文

三 引用書名の略称は次のとおり表記した。

『昭定』 『昭和定本日蓮聖人遺文』

『正藏』 『大正新脩大藏經』

〈キーワード〉日蓮聖人教学、四依の菩薩、天台大師、伝教大師、法華経の行者、上行菩薩、題目、南無妙法蓮華経、一大秘法、三大秘法